

フェリックス・ホフマンさんの絵本

福音館書店相談役

松居 直

フェリックス・ホフマンさんの最後の絵本は 1975 年に日本で出版した『クリスマスのものがたり』で、この絵本が出来あがる直前にホフマンさんは惜しくも 64 歳で不帰の客とされました。この聖書物語の絵本は、1961 年にスイスで出版された『聖書物語』（1991 年に日本基督教団出版局発行）というホフマンさんのライフワークともいべき旧・新約聖書の画集をいただいたころから、いつかはクリスマスの絵本をかいていただこうと考えていた夢の実現でした。クリスマスの絵本は数多くありますが、わたくしはどうしてもフェリックス・ホフマンさんに描いていただきたかったのです。

この企画を思い切って提案したとき、ホフマンさんは喜んで引受けるという返事をくださいました。日本の一出版社の申し出を即座に受け入れてくださったご厚意に、わたくしはとても感動したものです。校正刷まではお見せできたのですが、完成した絵本を見ていただけなかったことがかえすがえすも心残りです。この絵本が完成したら、ぜひ一度日本へ来ていただきたいと願っていましたが、それも実現できませんでした。

年譜をごらんになるとおわかりでしょうが、ホフマンさんがお子さん方のためにはじめて絵本をお作りになったのは、1945 年で 34 歳のころです。それが「おおかみと七ひきのこやぎ」の祖稿です。ホフマンさんがとてもやさしいお父さんであったことは、娘さんたちの思い出からもよくおわかりになるでしょう。初期の四冊の絵本は、それぞれ三女スザンヌ、次女クリスティアーネ、長女サビーネ、そして長男ディーターにプレゼントされた作品ですし、その後の絵本もそれぞれお孫さんたちのために心をこめて描かれたものです。

ホフマンさんの絵本のさし絵が細部にわたって実にゆたかに、しかも静かに物語を語っているのは、子どもや孫に対する愛情が自然に深く絵を通して語りかけているからだとおもいます。その意味で、ホフマンさんは昔話を絵で語る“語り手”だったのです。昔話を絵本にすることを得意とする画家は少なくありませんし、傑作も数々ありますが、ホフマンさんのグリムの昔話絵本には見る者の心に昔話本来の語り口の温かさが伝わってきます。

それぞれの物語にふさわしい、確かなイメージの舞台を与える表現力は抜群ですが、その画面の細部に語りこめられている眼差しのやさしさは、ホフマンさんの温厚な表情と温かいほほえみそのものです。それでいてそのさし絵は決して甘いものではありません。ストイックともおもえるきびしさを感じさせます。この表現のきびしさと語りのやさしさが一体となったところに、ホフマンさんの独特の深みのある物語世界が成立しているとおもわれます。

ホフマンさんのグリムの昔話絵本が、最初にスイスのザウワーレンダー社から出版されたのは 1957 年ですから、祖稿「おおかみと七ひきのこやぎ」が描きあげられてから 10 年以上もの間、ホフマン家の家族のなかだけでひそかに“楽しみ”が共有され、愛読されていたことがわかります。この事実もホフマンさんの絵本の成り立ちを考えると、とても意味をもっているのではないのでしょうか。その祖稿の雰囲気をよく伝えているのが、亡くなった 2 年後の 1977 年に出版された『くまおとこ』（1984 年に日本語版がベネッセで発行）です。

このホフマン家に秘められていた宝物に眼をつけ、その価値を認めて美しい本づくりをした先代のザウワーレンダー社長に、わたくしは敬意を表します。画家と同じアールラウ市に住み、ヨーロッパでも有数のすぐれた出版事業をしてこられたザウワーレンダー氏は、ホフマンさんの絵本の芸術的価値とともに、さし絵のさまざまな場面に感じられる故郷の雰囲気が特に身近なものとして受けとめられ、強い共感をもたれたに違いありません。今もアールラウを訪ねますと、ホフマンさんの絵本の世界を歩いているような気がして、ふっと横丁から王子やおおかみが出てくるようなふしぎな気分になります。

ホフマンさんの絵本の日本における最初の出版は 1963 年の『ねむりひめ』です。当時わたくしはアロワ・カリジェやハンス・フィッシャーといったスイスの絵本画家の仕事に魅かれ、またおおいに学ぶところがありました。同時にまたフェリックス・ホフマンという絵本画家の仕事にも、眼をみはる思いがしました。ちょうど昔話の絵本化に強い関心を持ち模索していたところでしたから、ホフマンさんがグリムのテキストを全面的に生かし、確かな造形の絵本づくりをされていることに感心しました。これこそ昔話を絵本にするときのお手本だとおもいました。

実際に『ねむりひめ』を日本語に翻訳出版する編集作業をとおして、ホフマンさんの絵本表現の全体的な構成の確かさと、細部に秘められている工夫を学ぶことができました。翻訳出版は単に外国語を日本語に置き換えるだけのことではありません。原書を一度解体して、自分の手で再編成し、再編集するわけですから、その過程で画家や編集者の創意や工夫を探りだし、習得することができます。原書を見ているだけでは読みとれない、本づくりの作法を学びとることができます。

『ねむりひめ』を思い切って出版した当時は、一部の読者からは高い評価をえましたが、一般的にはとっつきにくい、むずかしい、わかりにくいといった印象をもたれ、なかなか受け入れられませんでした。わたくしは懸命に、本格的な昔話絵本としての『ねむりひめ』の価値を解明する努力を重ねました。この経験をとおして、さらに深くホフマンさんの絵本づくりの方法や心が理解できたとおもいます。このようにしていただいた絵本に対する一般の認識が変化してきたところで、1967 年に『おおかみと七ひきのこやぎ』の出版にこぎつきました。

1969 年にブラチスラバの第二回 B I B の国際審査委員会に出席した帰途、アールラウにホフマンさんを初めてお訪ねしました。この訪問でホフマンさんの昔話絵本が家族という血縁と、アールラウという土地との密接な地縁的つながりのなかで生まれたものであることを感じ、昔話絵本の編集のあり方に大きな示唆を与えられました。またこの時に、アールラウの大聖堂の正面を飾る三点の巨大なステンドグラスの作品をみることができ、フェリックス・ホフマンさんがこの分野においてもすばらしい芸術家であることを確かめる機会をえました。

今回の展覧会を機に、写真による複製ではありますが、ホフマンさんのステンドグラスのいくつかの作品に触れることができ、この芸術家が優れたクラフツマンシップの持主であることをあらためて確かめることができました。初期のルッパースヴィル教会のステンドグラス (1938 年頃) は、新約聖書のなかの劇的な場面を選び、物語性のはっきりした表現で絵画的に構成されていますが、1943~46 年に製作されたベルンのミュンスター大聖堂の大作は、旧約聖書という荘厳でダイナミックな世界を交えて、大胆にしかも緻密な構成で力強く造形しているその精神と技術に感嘆します。わたくしはそのなかにホフマンさんの聖書理解の深さと、賛美と祈りを強く感じました。

その後の数々のステンドグラスは、おもに新約聖書をモチーフにし、抽象的な表現を自由に取り入れて、ホフマンさん独自のステンドグラス芸術を意図しているようにおもいました。しかしステンドグラスは教会建築とキリスト教信仰の総和として、現地で現物をみることなしには語れないものです。作者がその地域社会の信仰共同体に何をもちたかをも省察することが要です。しかし手持ちの資料でそれに触れることはいまは不可能です。

ホフマンさんの晩年のお仕事でぜひとも取りあげなければならぬ作品は、没後の 1985 年にザウワレーンダー社から出版され、翌 1986 年に福音館書店から大塚勇三さんの訳で邦訳が出版された『グリムの昔話』全三巻です。この本にはホフマンさんの色刷りのさし絵 55 点と白黒のさし絵 39 点が収録されています。

この三巻本のグリム童話集をみたときの率直な印象は、これはホフマンさんのイメージされた「グリム大聖堂」に捧げられたステンドグラスではなかろうか、という思いでした。ホフマンさんにはグリム兄弟の昔話の全世界が壮大な殿堂のようにイメージされていたのではないのでしょうか。その殿堂に一つひとつの物語のさし絵をはめこむことにより、グリム兄弟への賛歌をうたいあげ、モニュメントとして残された

のだろうと感じました。

ホフマンさんはすぐれた版画家であり、ステンドグラスやフレスコ壁画の作家であり、さし絵画家、そして絵本画家であります。その作風は気取りがなく地味ですが、その静かな美しさは人間と自然に誠実なスイスの人々の思いがこめられているようです。

出典「父から子への贈り物 フェリックス・ホフマンの世界」
小さな絵本美術館©1998年発行